

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第31号

平成28年9月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

藤原氏の血を引く奥州の名門、白河結城氏

顕家の統治能力と宗広の政治力で奥羽54郡を統治

結城氏本流は北朝方、庶流が南朝方

8月例会は、白河結城氏と正行をテーマに学んだ。

畿内で正行が吉野の宮を精一杯支えていたころ、九州の菊池一族は武時の子、武重が病死し、その後、宮方が九州を統一するときの頭領、武光への移行期にあたり、菊池一族の惣領権不安定時代に遭遇していたことは7月例会で学んだ。

では、同じ頃、奥州南朝の雄、結城氏の状況はどうであったのか。

南朝の雄、結城氏ではあるが、正確には「白河結城氏」である。結城氏は、初代朝光が開くが、元服の折り、その烏帽子親は源頼朝が務めている。このことから分かるように、結城氏本流（下総結城氏と云う）は、正成の挙兵した赤坂攻めに参加し、尊氏に従い討幕派に加わったことを皮切りに、建武元年1334竹之下の戦いでも尊氏に従い戦功を挙げ、延元元年1336年12月には北畠顕家を退け、南朝軍を迎え撃っている。

また、正行の死後、正平7年1352の尊氏と新田義興・義宗の武蔵金井原の戦いには結城直光が真っ先に参陣し、尊氏を喜ばせ、翌年、尊氏の上洛の際にはその先陣に抜擢され、武蔵の国の千台荘等を与えられている。

このように、本流の白河結城氏は一貫して、一族を通じて、尊氏、北朝方に加担をしている。

南朝一筋に生きた宗広、親光

この白河結城氏三代目広綱の弟、祐広が、白河荘で白河結城氏を創設し、二代目宗広、三代目親光（次男）は、南朝を献身的に支えるのである。

宗広は、後醍醐帝から結城氏一族の惣領職を与えられ、北畠顕家とともに多賀城に入り、建武元年1334から延元2年1337の数年間、奥羽54郡を統治するほどの実力を発揮している。

また、次男の親光は、建武新政府では検非違使・左衛

門尉に任じられ、帝の警護に当たり、楠木正成・千種忠顕・名和長年と共に南朝方「三木一草」と呼ばれる活躍をする。

しかし、帝の側近であったが故、信貴山から下山しなかった護良親王を名和長年とともに連行する役目を負わされ、延元元年1336正月、尊氏暗殺を企て、偽って降伏し尊氏に近づくも見破られ、刺殺される、と云う非業な運命をたどる。

宗広は、北畠顕家に従い、奥州、伊勢、奈良、河内と移動後、顕家が堺石津で戦死すると、鎮守府将軍となった義良親王に同道し、伊勢大湊からの東航作戦に参加するが、船が難破し、伊勢に上陸。延元3年1338、伊勢の地で没している。享年70歳。

この宗広は、延元元年、京都奪還で大功を立て、帝から直接言葉を賜ったり、鎮守府将軍の義良親王に同道する際、帝からの恩賞を辞退するなど、藤原氏の血を引く名門、結城氏としての存在感を示す。

そして、村上氏名門の北畠親房は、共通する由緒正しき家門が故に、この白河結城氏に支援を求め続けるのである。これが、歴史に有名な、北畠親房が5年もの長きにわたって、結城親朝に送り続けた関城書である。

結城親朝は、宗広の長男で、親光の兄である。

親房の説得を拒み、北朝に就いた親朝

宗広が京の都と奥州を駆け巡る運命にあった時、嫡男、親朝は常に奥州にあって、白河結城氏を束ね、父不在の多賀を守る役割を担っていた。

だから、当初、親朝は北畠親房、顕家親子を補佐し、支援をしている。

しかし、白河結城氏の将来を考え、親房の公家優越世家蔑視の説得に、最後は結論を下し、興国4年1343、8月、親房の説得を拒み、北朝に就くことになる。

そして、親朝は正行が四條畷に散る前年、正平2年1347、死去する。九州の菊池氏同様、ここにも、正行の悲劇が

